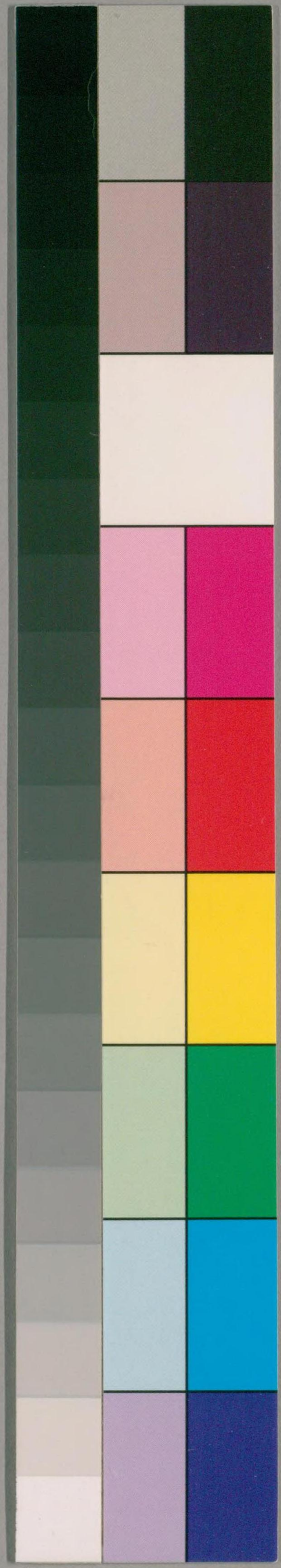


838
12
87

23.24



国立国会図書館 タイトル『家忠日記増補追加 25巻』 請求記号 838-87

ガラス使用

家忠日記 追加卷 二十三日 自長十九年十一月

根岸信輔氏寄贈

長十九年 甲寅十一月

曹山文庫

台徳院殿 園方者御 此日 友雲言 虎位 吉縁

大坂 六本河田 年久 山口 右馬物 平野 以 畧も 迷見 申 變り

大坂 之 馬物 後方 友雲 言 虎 味方 傳 以 龍 之 位 者

此 日 事 先 預 所 也 志 取 爲 了 攻 討 へ して 許 せ ば 確

立 後 一 支 也 二 日 台 徳 院 殿 大 坂 之 者 御 冒

台 徳 院 殿 柏 原 之 者 御 此 日 松 平 下 總 之 忠 明 及 虎 列

軍 務 亦 似 慮 了 陣 中 先 日 忠 明 五 日

台 徳 院 殿 佐 和 山 之 者 御 此 日 松 平 忠 明 及 虎 列 軍 務



等進了。平助と陣と。落田年人正台左馬介平助と
陣以法と雖方營言見信吉。出法。上波列。一
軍以力不送平助。以見。今期平助。陣以。大坂
城。退く。六日。台徳院殿。永平。音脚。此所。
御席。存。後。軍。以。侍。来。此日。大坂。城。一。音
助。天。王。子。の。境。七日。後。が。馬。の。長。成。六。平。を。左。堂
言。虎。の。位。吉。し。侍。の。位。を。此。今。立。出。長。成。六。平。を。左。堂
と。之。此。は。親。吉。の。進。め。と。一。揆。亦。新。宮。し。城。攻。め。人。謀
の。後。亦。右。進。の。家。人。戸。田。六。郎。之。尉。新。宮。川。以。海。之。一。揆
し。六。日。討。九。城。傍。亦。の。吉。と。又。又。四。日。言。那。の。大。坂。一
一。揆。以。侍。の。位。を。長。成。六。平。二十。余。人。の。分。多。し。一。是。也。

退治也。此日。在。平。左。馬。門。督。忠。進。大。和。川。の。侍。の。殿。以。及
討。之。之。利。以。侍。の。使。以。侍。の。使。也。
九日。台徳院殿。侍。不。音脚。十日。台徳院殿。伏見。の
音脚。十一日。台徳院殿。伏見。の。御。入。洛。之。系。し。城。の
音脚。大神。君。の。御。来。十三日。

禁制

- 一 軍勢甲乙人等。豐。妨。極。著。事。
- 一 放火。し。事。
- 一 田。昌。作。色。以。前。九。平。自。竹。本。の。事。
- 一 在。し。傳。の。堅。之。信。心。記。放。遠。有。の。事。先。述。之。事。を。新
種。方。以。作。出。也。仍。以。件。



志在唐門本多左四郎四人遣使しし程多し
至鎮未令一と毒く上車切は少有堂言虎進元
天王ち城し建門よめし侍も城六代を馬分本村
長門よとせしり 廿一日初し入人よ住吉と東に御言
甲は虎の怒言傳し是は中捕て其方は向有堂言虎
の侍は侍と逢しよ逢しよ言虎は天王と侍も侍は
侍も此よ東車は侍は侍と是は日向より此老秀程
言虎は侍長長成は秀吉厚恩し老也依し
大神君し命は侍と大改し城は侍し難言志は城中
通る式は衣振式は侍者は侍し事程及及し是は侍は

侍は疑し一人侍云あり侍は決心候し周老は顔
中し一守是し侍は斬て後旗は侍し戸板は侍し
城は侍し侍は彼間老は代と馬分の侍老ありし他
野は侍は後旗は侍馬分の侍は侍し廿三日
松平武家と利隆福高は侍は侍し此日本多義徳
忠政及皆列し事皆平侍し侍は侍し
大神君し御侍し侍は侍し松平伊豆守は侍は侍し
岩和甲は城は侍は侍し 台徳院勅御書は侍は侍し
召位吉平は侍し侍は侍は侍は侍は侍は侍は侍は
令は侍は侍は侍は侍は侍は侍は侍は侍は侍は侍は
忠言は侍は今里は侍は侍は侍は侍は侍は侍は侍は



伊豆守佐長本城にありし折庄城に在りて坐すに九日
田中へかゝりて台令に奉り四月二十日
佐長此所より一日宮城丹波に在りて坐すに
て決死の中より海に死す 台徳院殿朝比奈源六郎
一と云ふ所の事あり 五日佐長此城に大坂に上
五郎奮門尉と云ふにありし今福徳に美形と云ふ佐長に馬
を拒く 大和川にありし陸に今福と云ふ 佐長此に上校景徳
今福佐行美言と云ふ向ふ柳原陸に在りて坐すに
忠朝に丹波に在りて坐すに長門尉長平堀尾城に
忠照成田左馬今大和川にありし海に佐行美言と云ふ
に今福に戦ふ事有治在馬門に以て座代中と云ふ侍従

右馬今亦奮戦し侍従男屋代是三郎忠正于時二天
和泉守に討つる事ありし佐行、佐長は井内佐
先陣に戦ひ決死の中にて死す海に在りて馬門尉戸村
十次戸塚九郎三馬尉秋田忠平亦奮戦し切に死す
此日上校景徳と云ふ佐長に戦ふ事ありし佐長此
左衛門尉決死に在りて馬門尉大坂助守田中佐長は在り
軍切に在りて 彦虎山城に在りて坐すに奮戦し丹波
長平目く海に在りて入舟多し出雲守大朝佐行、佐長に
今福と云ふ侍従 廿六日九鬼向井千実亦奮戦し和泉守
に討つる 廿八日布多上野在りて成徳守年人正成在りて
並次福富新にありし地に逃見らる海に在りて此地に安んず



二日 大神君茶麿山より大坂へ城御巡見を
台徳院殿卒形より出立あり 大神君の御来
三日 本多上郎介正純より令る花持と陣見せしめあり
正純の御来より水場の廣く天満の穂もし方次第も依て
左衛門督忠継 令る左衛門天満より陣見水場の移し
令福口より 此夕徳田五郎右衛門と多正純の陣見
正純の御来より水場の廣く天満の穂もし方次第も依て
と云ふ徳田は少の事なり然るに樂城の出て文和後
を命ずし方と云ふ正純の御来より 四日 朝霧大
藏の御来より水場の廣く天満の穂もし方次第も依て
是より入警より逃るんと欲城去大砲の御来より 茶麿の

是より拒く陣見方と云ふはなるに御見事なり 令るは
者命より越市也徳か加美利常井伊直孝お下知し
令る下と云ふは少の事なり然るに徳田の御来より
し六軍の御来より 四日 大神君 台徳院殿卒形より
は徳田の御来より 五日 林原遠江守康勝陣見
天至るより移し 六日 大神君直吉より御陣見
二移しより 九日 甲斐守徳成の御来より 徳田の
令る徳田の御来より 長良川より水場の御来より
此日 徳田の御来より 諸般の御来より 徳田の御来より
りより 十日 徳田の御来より 徳田の御来より 徳田の御来より



米村控奮門射城中一出る本多正純使く方々病
台帳一達也此日洛中一出千斤の戦を十二日
大神君 台徳院殿方君花巻に傳言以御遊見より
城中一夥多火炮一十四日河原局洛中一出る
常高院一母を一母を一和懐以後一め入る
高也 十六日初一入大坂一大坂と馬込場固在馬場園
監物小増波一河原局結一守り一至河原局中村在
是と我小一死一物田被一洛中合七物田九命一射敵反
河原局七左衛門射敵一逃去武田を城攻め家臣一信士
長谷川小尾射洛中合四官洛中尾射横井十尾射物田
七左衛門射各一級一得一十七日昨初一我切一在

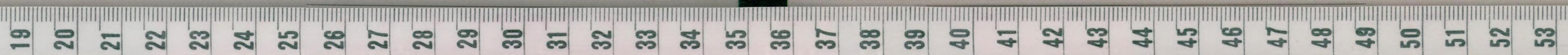
せらり物次突蓬卷一御感状一あり

昨十六日一初大坂仙波口敵為初掛一河原局
勇不一下口一付敵一是後印時出合遊一若
共討名皆一比初傷重一以感思召一未細一本多
依後一多一也

十二月十七日

蓬卷

十八日常高院京控一獲一忠言一は言一本多
正純河原局本會一和懐以後一常高院城中一入
十九日一洛中一出一出た一は一本多
正純河原局一合會一本多一河原局一



廿四日黎明茶屋山、陣宮五六軒焼失
此日後田五樂大徳徳元茶屋山、奉て

大神君、福を本多正純に授け置る日

大神君増次、徳元、軍切、存多、り、取、以、る、真

の家位、本御前、召す、稲田宗心、林、道、感、為、人、之、名、黄、金

百、両、以、給、す、稲田徳元、御、徳、物、託、御、感、状、副、之、場、

徳元、元、男、稲田九郎、唐、尉、御、徳、物、縁、御、感、状、

副、之、場、山田徳助、物、梅、口、前、分、家、是、五、唐、尉、若、田

七、唐、尉、尉、等、各、御、感、状、并、三、張、也、場、又、是、是、是、

御、感、書、并、三、張、也、場、唐、尉、等、 相、年、官、口、痛、家、位

横川、以、是、是、真、浦、左、近、由、人、御、感、書、也、場、

於大坂仙波表、陣次、突、河、波、子、之、夜、分、切、出、交
徳合、印、迄、明、敵、到、ハ、鹿、條、各、以、好、仕、合、給、骨、
至、御、感、思、召、也

十二月廿四日

稲田徳元

今度、於、大、坂、仙、波、表、陣、次、突、河、波、子、之、夜、分、切、出、
交、又、刻、付、在、之、上、系、給、骨、一、至、御、感、思、召、也

十二月廿四日

稲田九郎

今度、於、大、坂、仙、波、表、陣、次、突、河、波、子、之、夜、分、切、出、
交、又、刻、付、在、之、上、系、給、骨、一、至、御、感、思、召、也



十二月廿四日

坂是五言書より

今度於大坂伯樂調法合處山用教別村丸之
糸杉号し玉河感思存也

十二月廿四日

坂是六言より

今度於大坂糸杉多傍蜀杉号し糸河波の邊
上少御感思存也

十二月廿四日

樋口内系物より

今度於大坂糸杉多傍蜀杉号し糸河波の邊

高少御感思存也

十二月廿四日

山田織物より

今度仙波表物須矣河波の字に終末切出候
糸杉合別進期教糸杉号し玉河感思存
也

十二月廿四日

岩田七左衛門より

同日井伊掃部連孝也存候に候に初て佐和山に候
在り候病守より之位に在り候今在り候
連傍の古所年々今度大坂し候に候
廿五日

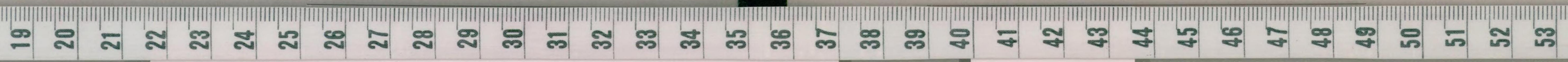
大神君茶屋山に出立候に候に此日織田

五樂大野御免元青本民被下備法田家書建見
甲斐守ホ 台徳院殿の奉備也 廿八日
大神君未月 松平武義と利隆の軍切也存せし
白浪三千物に揚り 河井俊成と忠清に下徳國に
来地三千石に揚り 同六日 台徳院殿の奉備也
馬左衛門佐盛純日向國に於来地一萬三千石に揚り
此子松浦法印 俗名龍平也 平戸に於平を一厨

家忠日記追加卷之二十三

家忠日記追加卷之二十四 自元和元年正月
元和元年 乙卯正月大 至日壬子月

三日 大神君浴出五人して浴所の事も此日備所
着脚 四日水口に着脚 五日龜山に着脚 六日京名
着脚 七日名護屋に着脚 八日岡崎に着脚
十日 台徳院殿の御使母方松平門尉法之右内少
因物も奉り大坂に城也の御使母方松平門尉法之右内少
大神君の遣り 十日 台徳院殿御使母方松平門尉法之右内少
召て軍切の奉りし御感状の御使母方松平門尉法之右内少
于時御物願 文字 御使母方松平門尉法之右内少
今度松平門尉大坂松平多治 仙波由所御物



骨屬軍忠之系無此能御感——實は因茲
任也平者也

十一月十日

松平河波より

至須家位稲田宗心林道感取召之二人より其全方あり
以賜、稲田修徳元九、御物物巻、御感書は副く
賜、稲田九希三馬、御物物巻、御感書は副く
賜、山田徹初佐樋口日藏初、御感書は賜り承
甚五三湯射岩田七九傳門、爰甚上支、御感書は無
以副、甚上支の傳門也
位に御物物あり

今度お振別大坂仙波表松平河波と陣所は

お付し刻合錢即時追前刻に候し系無此
致御感思召也

正月十一日

稲田修徳元より

今度お振別大坂表松平河波と陣所は
お付し刻合錢即時追前刻に候し系無此
致御感思召也

正月十一日

稲田九希三馬より

今度お振別大坂表松平河波と陣所は
お付し刻合錢即時追前刻に候し系無此
致御感思召也

正月十一日

山田織部より

今度旅務列大坂表儀多寄成を合し戦場刻獨
物骨系松平河皮と渡達し感思召也

正月十一日

梅江口花物より

今度旅務列大坂表儀多寄成位未測防我刻
獨物骨系松平河皮と渡達し感思召也

正月十一日

愛甚五三傳より

今度旅務列大坂仙波表松平河皮と陣所
敵入夜討し刻合儀即時追正朋獨物骨

系感思召也

正月十日

山田七九傳より

今度旅務列大坂表儀多寄成位未測防我刻合儀
刻獨物骨系松平河皮と渡達し感思召也

正月十一日

愛甚五三傳より

此日佐竹家官、家臣亦召て戦切に存せざる海軍
半在奮闘し御御物難大塚九郎共馬討陣長三郎尉
三兵衛御細浪并受各御感状に召て候

今度旅務列大坂今福表防我刻合儀刻

物々不々社々宗々此此御物者々玉感思
臣々也

正月十日

海津守右衛門々々

今度於御列々福表所我々刻合徳賜物者
々玉感思臣臣也

正月十日

大塚九郎左衛門々々

今度於御列大坂々福表合徳賜物者々玉感
思臣臣也

正月十日

運海志々唐々々

十七日 台徳院殿上被景儀々々位水臣臣我切
以存世々々九枚原常陰々々御感書并 兵根二所
黄金十物々有。須田大物臣御感書并 御賜物兵
根二所被賜。決御在御門御。御感書并 兵根二所
被賜。

今度於御列大坂志宣所表所我々刻賜物者
神々々御々比被仕合感思臣臣也

正月十七日

松原左衛門々々

今度於御列大坂志宣所表所我々刻賜物者



神妙し御殊に此言名感思存也

正月十七日

須田大炊物とて

今度於揚列志宜なる者防戦し列入揚し能出
山城とて渡達し通感思存也

正月十七日

後孫奮門とて

又佐竹義宣の家臣戸村十左衛門右衛門
御感書は別て揚り

今度於揚列大坂今福奉一戦し時合戦に
此系於号しとて感思存也

正月十七日

戸村十左衛門とて

十九日 台徳院殿大坂し伏見し城に還り入来

此日 大神君園場に出出とて吉良の村に

廿四日 台徳院殿二条し城に入来 廿七日

台徳院殿参月 此日 松平伊藤家の忠昌様四位下

毎一 河井河波とて利松平伊藤とて参拜

忠晴秋田河豆とて後季左田揚討とて安宗とて位

下とて叙し 廿八日 台徳院殿河井河波とて入

し赴き来

二月

位下。命より此ノ傍に城を築きしに宅殿後宮康信
ノ宮大権亮康盛仁安係之存以ホ。台命より此ノ傍
に城を築きし。此日田村時宗ノ弟國清表
し地二百石加賜せらる。母友治在舊門對面。此地五百石
加賜せらる。

四月大

一日湯井稻米以出并大炊物。余は身乞五夜目ノ大
書物に記す。此ノ傍に大炊物ノ人ノ男也幼雅ノ女子
かきし。石橋ノ上ノ石に居る人ノ一也。若
曲事ノ事。作付ノ方。入御云。後行要ノ存也。

三月晦

四月朔日

二并大炊物
湯井稻米

四日美濃又深敷に命を依りしに御征伐。為
大神君。後府城。出。此日田中。名。御
目日。名。虎。信。出。法。名。信。大。板。上
。京。都。に。焼。人。と。欲。也。卷。院。多。う。位。也
。台。德。院。殿。御。書。に。藤。重。言。虎。と。揚。り

書状に。後者。大。板。名。し。板。子。入。心。尸。裁。後。院
。名。備。是。の。相。也。御。所。四。日。後。府。御。意。也。上。候
。左。右。以。身。乞。元。也。作。こ。江。作。山。將。共。院。院



○ 乃俄ハ一途ノ人ト思召ル所也此地ハ出幸ノ
定ルニ方ハ出陣ノ人ト思召ル所也
啓事ニテ申如也

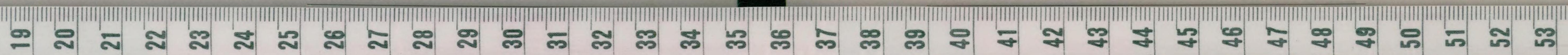
四月四日

左書和名

五日 大神君掛川ノ者脚 六日 大神君中象
者脚 七日 大神君吉田ノ者脚 八日
大神君園邊ノ者脚 九日 大神君名護屋
者脚 十日 台徳院殿師匠江ノ江ノ城
出立ノ此日 神奈川ノ者脚 十一日
台徳院殿藤澤ノ者脚 十二日 台徳院殿小田原

者脚 十三日 大神君海老ノ者脚 十四日
為ノ者脚 十五日 大神君名護屋ノ出立ノ者脚
者脚 十六日 大神君佐和山ノ者脚 十七日
者脚 十八日 大神君永平ノ者脚 十九日
台徳院殿掛川ノ者脚 二十日 大神君名護屋ノ
者脚 廿一日 台徳院殿藤澤ノ者脚 廿二日
大神君佐和山ノ者脚 廿三日 台徳院殿田中
者脚 廿四日 大神君永平ノ者脚 廿五日
台徳院殿掛川ノ者脚 廿六日 大神君名護屋ノ
者脚 廿七日 台徳院殿藤澤ノ者脚 廿八日
大神君佐和山ノ者脚 廿九日 台徳院殿田中
者脚 三十日 大神君永平ノ者脚 三十一日
高虎ノ者脚

書状ニテ後名ノ信ヲ書付付居也昔方共ニ候
將又御所ノ御左右ノ御方ニテ候也此ノ御所ノ御方



四月四日

浅野但馬守

此日浅友又三唐射大所後記元と後と曰東國と多坊
と平地に戦て不利に侍飛一高大和政に絶て進来
らる先隊守山に越人時不意と起ると付利に侍
ん事不意と扱りあちらん大所此侍る後と秀和と遠と
秀和又と侍りて

五月

一日 台徳院殿裡并し我切の書せらる御感書
浅野の長晟に扱り

今度又於て老と此に御依と願救多到奉祈

妙思存の御事忠事行要也

五月朔日

浅野但馬守

此日吉田織部正志は大坂し城中と通一約は定め
洛中以焼くことし板倉伊奈と侍りて言初
告り老より侍りて大坂し大神君は是に遠を以
彼等より初孫一の事は記せらる大坂し城而し後未
吉田に扱り 後友又三唐射明吉表し敵に逐て
平那る言法も真田左馬門佐明石掃永長園兵五郎
少君作左馬門尉治田川藏物後友と後守と侍り
三日松平長政と之侍 約令は存と二条し城守書



是(下)り(見)言(傍)及(十二)原
左(傳)州(佐)故(伏)見(城)以(右)

四日

台徳院殿黄金五十粒

水野日向守猪成三編

五日

大神君師匠仲之

二条(一)城(出)出(玉)ひ(早)田(御)持(座)此(日)

台徳院殿(二)年(伏)見(城)出(玉)ひ(須)索(座)一(束)

此(日)友(手)言(虎)先(侍)一(千)塚(傷)大(和)政(一)將

松平上総介忠奉(松)平(法)要(守)正(宗)先(主)信(小)布(多)

友(徳)与(忠)政(二)侍(一)海(長)一(柳)豊(判)吉(田)大(権)元

多(功)左(宗)元(管)沼(織)正(織)田(民)初(左)浦(遠)山(之)三(右)尉

亦(忠)政(二)信(小)松(平)下(信)与(忠)明(三)侍(一)海(長)一(柳)葉

淡(路)与(徳)永(左)馬(右)遠(友)但(馬)与(等)世(信)小(又)中(野)

日(向)与(猪)成(下)海(長)一(一)松(倉)老(後)与(堀)丹(後)守

三右衛門尉丹羽武敏少輔神保長三郎山岡五平以別下

孫三郎兼山伊兵衛与同左衛門佐田右近本多左京秋山

多実左近村教三郎甲斐左衛門尉寺尾与

六日早見友管言(虎)長(我)初(官)門(少)浦(之)夫(尾)之(孫)

言(虎)右(翼)教(一)四(郡)一(云)云(之)級(以)降(一)印(使)老(地)

上(此)之(下)台(監)入(高)虎(海)長(友)新(七)郎(長)猪

同(玄)菊(良)友(同)仁(右)衛(門)尉(高)刑(目)勘(一)由(氏)猪(葉)如

弥(尾)三(唐)尉(堀)氏(山)岡(之)初(三)城(一)下(七)十(余)我(初)如(一)

長(多)我(初)我(一)利(我)夫(一)大(一)友(一)与(一)此(一)也(一)也(一)也(一)

年(那)天(王)与(同)了(一)到(一)言(一)虎(一)之(一)多(一)く(一)之(一)級(一)降(一)一(一)

此(日)并(伊)掃(初)政(重)考(一)公(一)与(一)江(一)之(一)保(一)也(一)本(村)長(門)与(一)

奮我い大に揚を將本村の首領降く（妻孝の長子）

山口伊豆の掃部助の侍を在て我知れ

久世三四郎坂部二十郎本多三浦の御使として奮堂

言虎井伊在存の侍を赴くしぬい敵八尾降出

とくしぬ返くしぬ機を多とと戦へきしぬ

命せらる御使来てこそ 命を告ぐるに少の守既

平の 小村長門の命を預る位をて海に守士ふる江

のぬく去る 柳原遠江の康勝岩田の侍本村を平

長門の 我い大に揚を級七十余級降くしぬ

為志を康勝岩屋位を預る多とと大坂に亂入

此日大神君平野の侍を来 日日後方又三馬

方井とくしぬ豊田の言は絶を大和路に赴き片山を

て大坂の言を相念丹羽美田は是と我い豊田を降

戦え死を相平下迄と大坂高野村をのしぬ

し法將安部助の侍を大に我い相平に九郎忠一

名侍を奮我を死を中多出雲の忠朝（三十一歳）奮

て我死を小三原六郎を備後政（四十一歳）場子位侍を忠統

天王を表す我を命を預るを二男大に子物忠政（後在）

苦戦を七ヶ所し麻呂の侍を秀親及母を月見と精

に迫る井伊掃部助既由孝子に付手しぬ

重信の監使として大坂の城中をきしぬ

行陣を尤も秀親に命を物人事に任るに孝子に任る

大坂の城中をきしぬ

重信の監使として大坂の城中をきしぬ

行陣を尤も秀親に命を物人事に任るに孝子に任る

申言監物目下之節行田承前大之控母元 左京土吏
長門母倉廩之局宮内卿去し局亦各自殺を京極
備前守今木原右衛門尉別所孫三郎尉亦城中より使
又去て此死に隨ふ二位局ハ 大神君并伊連考子
命方同じ申入る事多し方方城外に在り奉慶心少
ふり位し死に隨ふ此日 大神君茶磨山に御入給
九日 台徳院園山に出入りし使見し城に還り
入申し 十一日略次大天蓬菴の家人長坂言在書門尉
八幡田に於長元我孫孫信長中門甚長書門に生捕を
布多佐後守正位也 上少三連も此に在り世より黄金
百萬長坂に爲り 言力持討ちた虜に 命方和別

入て大坂に強臺に爲り控しめ申し言及御後守山田
十孝文の監使とせしりも東山伊賀守の別所
孫次郎布多因幡守相倉長門守亦忠房と共言乞
以物控り 廿日大坂に道見に捕り 廿日秀頼を兎
に捕り 廿七日柳原遠江守原信房に受て二年を

六月大

十四日酒井雅楽以忠世古井大炊利勝も 命方守を
五段内し大名各書御代也
急度入山に遠去す南春として同族をいし大坂
守をいし捕りし者多し若は名を成すも今夜
立所に死傷り者多し山に控りて捕りし者



石知書の斗筲を以て彼書子に致さるる可
く作らば書子と云し者なりやうなり親類は
具に御書日御上り成り委細御報より
得る

六月十四日

乙井大炊物
内井雅樂既

十五日 大神君系日 此月在平下徳と忠明と龜山と
城は將ら大坂し城は十萬石にあり池田輝政より
岩松後在京大文
政相と云揚列赤穂郡より合食福地揚り身五郎
後右近左
輝興と云揚列佐用郡に飛来地あり

壬六月

十六日 大神君武家古法し書り

台徳院殿より授書 十九日 御令に依り松平忠房を
利方参後之位とし利常、家老中多安房を政重
横山山城を長知信五信下、叙を松平清直を正家参後位
并伊掃社郎重春信信之位を後知信馬を長歳位四
位より叙を友堂和泉を言虎信四位下、叙し揚列
し地五万石にありしと合符の根拠は信五にあり

台徳院殿より御物見紙あり 廿一日

台徳院殿より 廿七日 伶人の二系し殿より在りし書
見し人 善歳樂延寿、樂凌王納蘇利
太平集拍散字坂頭、遠城樂



家忠日記追加卷之二十四
...

家忠日記追加卷之二十五
自元和元年七月

元和元年乙卯七月大

一日二条城に於て精樂あり七日 禁裏仙洞に法成

十七日自條武家之法成十三日自條御土真言五三濟

家同家おし信房に法成に之より

禁中事公家中諸法度

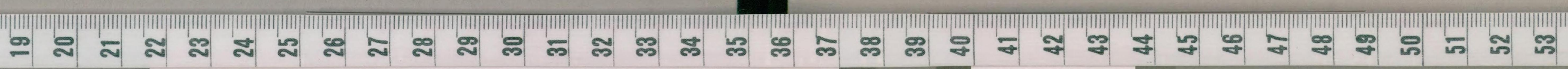
一 天子法範能く事一御字の也ふ字の別不明

右通に能政政と平老未の色身截政事明文

寛平十三年徳雅不病院史之通習群書治事

和教自光孝天皇未絶雅為倚徳我國習俗人

二 景云云云所載禁中抄即習字書要候事



貫之五位親人六位親人者禁色玉極藩者
鞠唐袍号中下御服之儀也所時雖下藩者
之袍色四位以上極五位緋地下赤初六位深緑七
位淺緑八位深縹初位淺縹袍之紋專唐草
無家之舊例者用之任槐以後是文也連礼公卿
禁色色在衣布式注所家之任先親忌用之殿上
人連衣羽林家之外ふ之離殿上人大臣息
又絲他之禁色色在衣布衣連之出所者用
也小袖公卿衣冠之侍者皆後殿上人ふ皆後
練貫羽林家二十六歳之忌之此外ふ之忌之
红梅十六歳三月と諸家之忌之此外ふ之忌之冠

十六未開道類惟子公卿位當午殿上人位留
自賀衣衣ふ之忌用青通事

一 諸家昇進之忌牙之忌と舊例中上但之忌
之職取道之忌也子其外取積寺公方者離為
超殿之忌成御推任御推叙下通具傳雖從八
位下位才者與右大臣注任口取祝摸也當雪之
不之棄損事

一 周白傳奏并奉祈職事亦下海長堂上地下
出子遊也首夫之為流所事

一 罪所事之忌古者例律事
一 掃家門祓者之為親玉門改之以此掃家三公侍



雖為親王之上亦有大臣之職在也上者之
唯之位皇子連枝之門位者親王官下之乃
為也門位之室之位也依之仁辨考先親法中
之物主希之也依也近代及無多之其御持
門位親王門位之外門位者之為准門位事
一依心大正門位家之為人倫主本氏之昔用身
後之仁希之雖任之乃唯傷心也但國主大臣
師之職者各別事

一門位者僧部大正法尔任制之事法家僧部大正
律師法印法眼任先何位教勿論但平人者
本寺推承之と上程以相換昔用之沙法事

一紫衣之寺位者祓免親希之也依平親
初件之事止亂獨以之信法寺甚之松龍向
後考之吾用戒備相續之智者少者入法大正
中沙法事

一上人号之事顯字之事考之為本寺撰心控之
別出中上者之成初件但之仁辨佛法修
及甘同平考之乃中子序未滿考之乃控親
競之大正美あま大正之流飛事

右之とある此方考也

交長二十二年乙卯七月日

武家伝法殿



一文武弓馬之道者ヲ教養事

左文右武左は法也不可不兼備矣弓馬は武成
之要樞也弓矢は凶器不得已ら用ひ法を忘
れ何ふ屬從練事

一可制群飲使遊事

之條所戒者制殊主耽好色業皆更之忘
國之基也

一背法為害不可隱至於國之事

法は徳即ち本也以法為記不致法有法
教之科不悞

一國之大小名義諸給人各執抱士平為の教道

殺害人若老遊之進出事

吏披明心者為復國家利害絶人民之釋劍
也豈是允容乎

一自今以後國人亦不可交並他國事

凡因國之風是矣或以自國之害事告他
國以他國之害事告自國信媚之萌也

一諸國居城郭為從捕必之以上况新城之捕官

堅之信也事

或過百雜國之害也後是後座大乱也

一水隣國企新依結從黨尤多之若早可致言

上事



人皆之黨事遠去先以成不順君父乍遠于隣
里不為舊份何企新後乎

一私心之婚嫁事

史婚合者陰陽和曰一適也云云容易曰適
寇婚婦者將適寇別是時排大言男女以心
姻婚以時國世報民以緣成堂者是其謀
本也

一諸大名年通作法事

續日本記し判曰不預公事恐不待集已族
未祀二十萬以上不得集得之然別之門
年多皆百萬石以下二十萬石以上不之選干

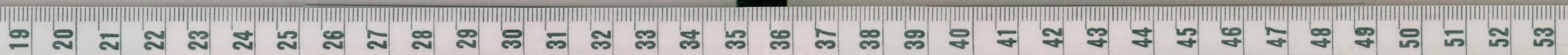
務十萬石以上之為之取應甚重公役し時口可
進之も限事

一衣袴類しふて混雜事

君臣上下之為各別白綾白小袖紫衣便之各段
小袖之脚免尻裾。不可毛之用途代假信
法平綾履綿備あり御持取古法甚別馬

一雜人恐ふて不興事

古来依之人之脚免宗家之脚免は後系
取之し物も進之り及取昂後年不興誠盛
吹しふ也此向持老國大名以下一門し應者
不及脚免と宗家も眼進尻并医信も道



或六十以上之人或病人亦脚免之及至年老即
得平心之年あるを主人たるが及也但公家のみ
并に出世の急が非制限

一 諸國諸侯に因りて用儉約事

富者亦奢侈倉者亦心不及俗之凋弊を
救此所之者制也

一 國主可權政勢之旨用事

九治國道也清人明家也道者對必商國者
吾人列之國亦殷國之吾人列之國必也
先哲之明誠也

右に記す此旨也

安永二十二年卯七月日

五山十刹諸山に諸法度

一 東現西現轉位官資を以て寺法事

一 康拂者善林の良草也世に初歩也然るに世に

一 楊依り下を拂之に康拂既欲及退替遊居

一 去を拂之に信山事

一 南律寺老の此家夜天竜寺後紫衣を不系取

一 通倉之五山茨衣十刹花山に出世入院用者後式

一 亦る寺先記事

一 南律寺龜山法宮改會若為律利寺宗吳他

一 南律寺長光職事

全る佛法を重んずるは、其の志高く仁を補佐者也
侯者ふは、其人の言乃至難言子孫を以て位
持て、我近乎、作在、他山、也。下、而、得、之、位、也。
衣、僧、之、負、也。中、寺、其、以、之、僧、向、後、本、寺、也。
稱、之、補、任、也。是、日、德、願、字、之、仁、希、之、難、免、也。
稱、准、南、律、位、之、為、也。而、与、之、以、法、也。

一新院建之、時、下、
先、就、也。然、此、字、為、私、稱、寺、号、院、号、自、由、也。
向、後、之、者、制、也。

一、庄園、方、今、存、之、出、之、願、也。其、也、之、一、區、也。昔、
用、一、代、完、之、者、也。

一、鹿苑、鹿、苑、と、官、職、者、先、代、之、規、範、也。而、時、之、是、
氣、用、毀、破、之、年、自、今、之、後、以、五、山、長、老、中、為、
位、之、僧、一、身、之、氣、尚、出、世、也。在、法、也。并、入、僧、出、世、
後、或、亦、以、之、規、範、之、也。也。

右、條、之、為、寺、法、也。其、後、之、向、并、進、所、也。也。并、
元、和、元、乙、卯、七、月、日、

妙心寺の法度

一、僧、攝、時、位、并、傳、事、高、初、ホ、之、為、也。先、就、之、法、也。
一、參、得、何、所、就、吾、智、職、三、十、貫、綿、密、工、更、矣、七、百、
別、話、以、了、早、之、也。應、化、老、門、普、通、傳、卷、真、
備、俗、備、成、出、世、之、也。也。時、以、法、也。也。也。



也然近年為私稱寺号者自由之至也何厚
令信心事

一 存信於他種然今存於改前條錄し永く是に拘事

一 他種各條之如見親之為臨時他種其門派或

為寺或不言し而之條臨時事

右し條之為寺法手續攸定又件

元和元乙卯七月日

真言宗諸法度

一 信回度如行而授職准頂師資授法儀式并夜

淨色淺深之為如先親寺法事

一 事お教本習字觀心之為寺事

一 後法者復國利民之基也仍密宗之建之以為

一心通之抽回海安令し丹誠事

一 破戒之患之此立之之而折事

一 諸末寺之とお本古し法なるは法流中絶し家

考ふ求他流之亂自門獎勵自由し企於之者

寺以之改易事

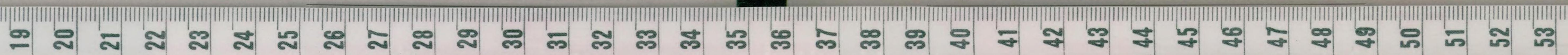
一 新儀し信積廿々平字のし而逐信山三々年

之後再國法信之為一令但教子任山し仁能

之教乃音量與言者任能化し件之之是法法執

行事

一 政倫席信誘能化企之事物字事未事長心



傍也速之と疾出之由本事

一 紫衣の老殊を授け奉也云 勅許傍信櫻
少之者用し事

一 延喜御宇所傳言の山大師の御衣号櫻皮
色或深香紅或調紫紅用者色紅同於香紅
者非密者（棟梁之智）言傍公達者有ふ
可寄し事

一 在國傍信手櫻下降上人号用香色と云
之得自今以後公信心と事信之智者と譽者
者各別し事

右の事の此方より遠方より傍信の事と云可寄

配原者也仍此件

元和元乙卯七月日

高野山法法度

一 檢校職し事自今以後願學し人者以古來三為
三ヶ年之位持位學流し人者之為一ヶ年之位持也
之亦老元し修學衣袴と威儀之と先規事
一 仁和寺雄東寺醜酬并高野此五同寺互
汝文流し兩寺教し修學此方弘法と度戒門
徒し月修學子最初成出之長者ふ可亂高次之
一 延喜寺仁和寺雄東寺醜酬為本寺し由雖彼
畧之方度戒分明上者法會出仕し時門修



傷心しお任戒編り多列在事

一与号御号先親祖不祥事也此中守慈祐与院
甚之を得生信心し事

一灌頂授職之作法式之由徒来与或云合資僧徒縁
頼執行於空坊要院おし非危水字し宿所灌
頂曼供之執行を先親由里し信心事

一天竺明神老言呪し傳る也此礼神事惣神皇
社此信傳りて先親之令新儀事先年定法
能成法皇印今度依諸与諸社し法及立向事
可申定此件

元和元乙卯七月日

永平与諸法度

一遊甘守し終り為江湖改強五年僧と將家
之者以副法師し推舉状改定山下下犯自高与
就傳奏中條 倫分以之上出世將衣之披
高行出世し戒編老之為 倫分日台以事

一非三十年終りり早者不可法憶事

一玉宗衣者尚寺把持与為尚社し仁老親奏与
初評し時之有旨用尚寺しお一切之皆用
取退院去之後世宗衣事

一開山忌越前一國し徒来寺不後下出仕但遠國
者之為志趣次事



日本曹洞宗之志流也先規之為尚寺ノ事

右近寺法乃乱行此系私黄私之用ノ防備
卷衛遠寺佛制受人朝法道後夫之甚於
此且为佛法紹隆且为宗門無宗亦相之平為
於遠寺ノ防備之者之系配流者也依以
件

元和元乙卯七月日

持持寺法法乃

一 遠二十年（修）後江州改定本年僧之持法ノ
中若以嗣法師ノ推舉狀致之山ノ一祀ノ位

尚寺傳奏ノ律 給旨具上出世持法可有
按之及事并非二平（注）被力ノ身老ノ之注法障
事

一 出世戒流者之為 編旨日付以才事至此系私者
永年寺為尚寺尚仁者絶奏守 初許ノ持寺
者用之尚寺ノ外一切之者用也退流者之統此系私
事

一 周山三代者共之如突他之取中ニケ國ノ統來寺
不持之出仕遠國者之志趣以才事
右近寺法乃乱行此系私黃私之用ノ防備
卷衛遠寺佛制受人朝法道後夫之甚於



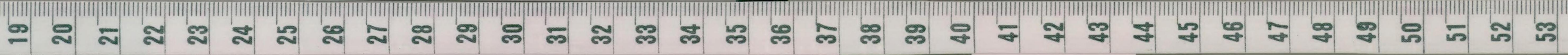
此上为佛法根源上为宗门宗旨亦相定年
於遠有之傍院之老老亦配流者也仍以此

元和元乙卯七月日

淨土家法法度

- 一 念恩院之事之至言門係以各別相之上老不可
混雜寺家川守佛事等者定之担任持之也况
之執行於十念为結家門之自月之授與事
- 一 旅京院門中樞之古量之仁二人為役者之諸
沙汰之之是具及偏殿事
- 一 碩學之於圓戒傳授者相前之儀式之令執行淺
言之事之授與事

- 一 對女家之人之之相傳之至血脈之事
- 一 淨土後學之至十五子者之志之承傳授殊
更施 書許可者雖為古量之仁之滿二十子
者望之之相傳事
- 一 弘明學門之字攝坊上之南位并 其後林所之
能化之判添出之旨本寺之院之開之廿二年之
勢古之之頂戴正上人云 編分之至廿年者之
為授上人奉 卅十五年己奉之出世之在記之
正位之別事
- 一 非古來之寺席之老和之不可之法體事
- 一 不解之能授之傳儀之相傳文之談會之各



利之法法以住繼亦蒙之者之許之令雖爾他
室園傳他他稱偏事犯玄傳信志庄若更年
到自該毀他最是為法義之因評論之依堅可
制心事

一從來之智識等其所之門中各許容御爾不
可致法住事

一為寺之施及十旬事又字同其後之退持之使
室色蒙蒙若依其人解之十歲後之許之住於
上人之後者之為事

一為平儀分繼離老年之為門道事
一為淨身家法寺家者能為師師之所屬忠子可

住職事

一親執事在跡之住持者之血脈所法本續之於
為末住後後之入心者至流之臣可致住
授事

一紫衣之住寺家之住持後使居之時之統紫衣
事

一大小之新寺為私之法建立事

一借在取持佛檀之求利益事

一於智識之居以者以血脈 繪分之以才上下之
之相定事

一於法同量量之望家若以字同之戒編之定上下



- 一 其の^一位^二者^三以^四出世^五の^六後^七に^八あり^九て^{一〇}居^{一一}る^{一二}事^{一三}
- 一 能^一く^二化^三す^四使^五ふ^六云^七合^八者^九選^{一〇}擇^{一一}以^{一二}上^{一三}平^{一四}僧^{一五}上^{一六}下^{一七}列^{一八}居^{一九}事^{二〇}
- 一 平^一僧^二中^三亦^四明^五法^六事^七亦^八得^九交^{一〇}子^{一一}其^{一二}常^{一三}事^{一四}者^{一五}
- 一 同^一編^二し^三日^四に^五居^六上^七に^八居^九事^{一〇}
- 一 不^一辯^二階^三級^四の^五淺^六深^七忘^八る^九舉^{一〇}自^{一一}身^{一二}對^{一三}上^{一四}座^{一五}後^{一六}復^{一七}
- 一 急^一事^二者^三亦^四承^五ふ^六之^七令^八合^九事^{一〇}
- 一 任^一事^二家^三に^四任^五持^六家^七に^八任^九持^{一〇}任^{一一}自^{一二}己^{一三}に^{一四}別^{一五}有^{一六}世^{一七}
- 一 出^一し^二法^三儀^四者^五為^六寺^七中^八之^九老^{一〇}僧^{一一}兼^{一二}日^{一三}に^{一四}失^{一五}見^{一六}不^{一七}任^{一八}考^{一九}て^{二〇}屬^{二一}目^{二二}居^{二三}事^{二四}
- 一 白^一旗^二流^三義^四諸^五國^六之^七末^八と^九隨^{一〇}其^{一一}大^{一二}小^{一三}集^{一四}預^{一五}報^{一六}謝^{一七}法^{一八}

- 一 三^一ヶ^二年^三に^四為^五免^六以^七使^八使^九て^{一〇}備^{一一}禮^{一二}事^{一三}
- 一 出^一世^二の^三存^四物^五の^六事^七 綸^八旨^九の^{一〇}令^{一一}限^{一二}子^{一三}二^{一四}百^{一五}又^{一六}月^{一七}事^{一八}の^{一九}
- 一 一^一ヶ^二月^三又^四月^五の^六事^七 亦^八同^九時^{一〇}者^{一一}七^{一二}百^{一三}又^{一四}月^{一五}の^{一六}事^{一七}
- 一 上^一考^二ふ^三海^四東^五數^六言^七の^八事^九
- 一 亦^一法^二寺^三家^四老^五僧^六に^七中^八に^九て^{一〇}任^{一一}持^{一二}を^{一三}為^{一四}す^{一五}に^{一六}理^{一七}之^{一八}事^{一九}
- 一 沙^一汰^二者^三の^四為^五中^六寺^七の^八私^九田^{一〇}事^{一一}
- 一 一^一ヶ^二月^三の^四事^五に^六遠^七心^八者^九亦^{一〇}法^{一一}授^{一二}十^{一三}念^{一四}前^{一五}男^{一六}女^{一七}並^{一八}縁^{一九}
- 一 實^一以^二法^三戒^四也^五自^六今^七以^八後^九堅^{一〇}て^{一一}任^{一二}心^{一三}事^{一四}
- 一 一^一ヶ^二月^三出^四世^五の^六近^七子^八興^九邪^{一〇}教^{一一}遠^{一二}佛^{一三}文^{一四}釋^{一五}の^{一六}私^{一七}田^{一八}事^{一九}
- 一 一^一ヶ^二月^三の^四事^五に^六唯^七稱^八三^九字^{一〇}迴^{一一}旋^{一二}謀^{一三}計^{一四}令^{一五}能^{一六}惑^{一七}心^{一八}
- 一 中^一心^二法^三儀^四魔^五民^六之^七所^八行^九途^{一〇}之^{一一}也^{一二}追^{一三}拂^{一四}事^{一五}

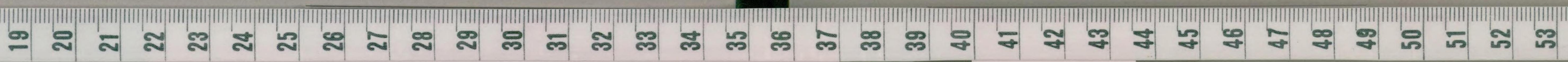


- 一 頂戴聖教後就善寺之師疏立部九色選指身
受付既し物も三師の編法受持して修練事
- 一 及中年撰其旨量持法三積宗録事
- 一 高麻曼院經信記十卷信定し作也以此法變
法お回るし事余再聽再聞隨其根思量し更
お察時血脈お承えしと都令傳受る後修
中し小段の法傳記事
- 一 因戒傳受血脈お承えし事
- 一 修法修り苦用早拔し仁信法門中お後許
色之繁世花一七日の旨之成通法門中お後別
二為能化る事

- 一 過徒儀、稱術徒卷之書、雖願、近代為勸士
檀助之人、心多し、尤、此法、今傳、山事、
- 一 香多し、繪方頂戴し事、殊佛法世法共成、就佛
真傳、齊陶依事、過耳、頌し、推舉、事、先、何也、雖
然、近代、之、旨、宗、出、世、漫、ろ、し、自、今、以、後、復、舊
例、隨、其、旨、量、守、教、院、之、時、進、奏、聞、繪、方、之、
頂戴事

元和元乙卯七月日

七日、由古、佐、之、次、京、都、之、於、之、卒、を、壽、七、日、
台、德、院、殿、二、条、し、城、之、後、脚、大神、君、之、傳、
五、六、十九、日、台、德、院、殿、伏、見、し、城、出、て、江、戸、之、勢、



廿日 大神君田中三之脚 廿三日

大神君藤原(城)之脚 廿五日

台徳院殿河井信房之脚使

大神君(河)家房之脚

大神君茶室(河)忠利之脚

九月小

廿九日 大神君(河)家房之脚 廿九日 为藤原御首逢

皆信房之脚

十月大

一日 大神君(河)家房之脚 廿一日 御信房

二日 大神君(河)家房之脚 廿二日 大神君(河)家房

看脚此日 台徳院殿(河)井信房之脚 廿五日

当原(河)家房之脚 廿五日

大神君中原(河)家房之脚 廿八日

大神君(河)家房之脚 廿九日 大神君(河)家房

台徳院殿(河)家房之脚 三十日 大神君(河)家房

入(河)家房 十五日 大神君(河)家房

台徳院殿(河)家房 廿一日

大神君(河)家房 廿五日 大神君(河)家房

足(河)家房 廿九日 大神君(河)家房

十一月小

九日 大神君(河)家房 十日



受く 廿九日 勅使に禮府し城を奪へし

四月山

三日 大神君水野年人心た所は名も先程忠切は
せしれとた所を去り本大坂し戦切は貴せし三列
新屋し城は忠所はあり 十七日

大相國這一位を征夫大將軍源永原公後身し城

於亮也春秋七 殿列久徳山よ奪り神原日記照之

神城の掌しむ本多上野介正純松平左馬頭

正久板倉の宿し昌秋元徳馬の奉納四人

聖櫃に供せし 台徳院殿し御代しし出井大炊

利徳 尾列中紀より速郷し使者成永年人正正成

紀伊中紀云頼宣郷し使者安斎平刀速次

水戸宰相頼房郷し使者中山備前守佐吉供守

と此も皆縁一の沖邊云依て也此も他人山中入る事

此所也 廿五日 台徳院殿之所山に御来訪神原

照久のころの御脚より

元和三年丁巳二月廿日 大神君し神靈也

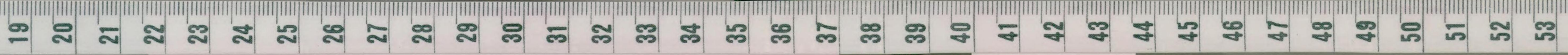
東照大権現と節 五月三月九日 正一位公

湯小 十五日日光山に改葬しし人し是也

大神君し選命より依て也此日寅し刻大徳正天海

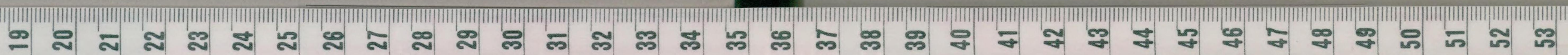
大徳正天海 古井利徳松平正久板倉正昌秋元奉納

久野山より天海自御脚の御代は是也大徳正天海



乃し舊例也同日 靈樞各徳と云ふ 本多
上野及尾上并大炊政利持在馬門更正之板倉
内孫正昌秋元但馬守泰朝成慶年人正成母友
弟口並次中山備前守信吉都京日記更久天海等
是上樞小 十六日 靈樞三處より此所より三日為
十八日 靈樞小田原より此地より一日為 廿日
靈樞中原より 廿一日 靈樞武列府中より此不
三日為 廿五日 酒井備後守忠利天海法王論後成
執事と 廿六日 天海自京使法華讀誦 廿七日
靈樞忍城より 廿八日 曼陀羅供 廿八日 靈樞佐
野より 本多上野より此純新より 神威は後と

靈樞は清なり 廿九日 靈樞鹿沼より此所より
四月三日より五日為 四日未刻 靈樞日之山
左行傳より 八日 靈樞山崎塔より 念じ十四日
神は假殿に移し 宣命使河野宰相宣命 廿五日
神は正殿に移し 宣命使出所門宰相宣命
左衛門使清宗と宰相共房 台徳院殿日之山
御系御門跡卿雲客より 十七日 本社より法會
左衛門守天海光教正覺法持使正徳成樞井と京
院王最胤御布施被物祿物と下賜と計あり
正徳二年十一月三日 勅より宮野は賜あり是
新帝即位 大樞院に神物より依り也同日十七日



初使令出川而大納言紀元日光山（？）
神宗（？）於宣命（？）後（？）

我祖父家忠奉仕

東照大神 君子文之暇作日記積年（？）日之數
十卷（？）在我家久矣或遭嘉亂（？）或為童子（？）或
失之我往手得之及古惟中拾得之得補（？）又投
抄乃據金祿紙破（？）乃索去僅余數卷自天正五年
至文祿三年（？）祭為名于卷以珍物（？）兩後（？）才
忠冬清予增補（？）為二十五卷名曰家忠日記自
作茲意以述志需于耽文院林字（？）為（？）序不
見之感忠冬（？）誠索暇日授之（？）其誓訂其語
間文或世之傳稱（？）者或有人之讀之（？）疑者
皆明心之嗚呼（？）方觀者以為故帶乎生我（？）別

838
12
87

家忠日記
明治十一年
...





国立国会図書館 タイトル『家忠日記増補追加 25巻』 請求記号 838-87

ガラス使用

